

アクティブ・ラーニング

文部科学省初等中等教育局視学官

田村 学

学習者がアクティブに学ぶ授業

昨年の11月20日に文部科学大臣から学習指導要領の改訂に向けて諮問が出された。その諮問文のキーワードにアクティブ・ラーニングがある。このアクティブ・ラーニングは、学習者である子ども一人ひとりが能動的に学ぶ授業の実現を期待するものであり、その反対が受動的な学習、すなわちパッシブ・ラーニングとなる。アクティブの言葉から、活動性の高い授業をイメージすることが多いようだが、活発になってほしいのは身体というよりも、むしろ思考であると考えられるべきであろう。

諮問文では、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」としていたが、本年8月には、中央教育審議会教育課程企画特別部会が論点整理を発表し、その中では次の三つの視点で授業を改善するとし、アクティブ・ラーニングのイメージを明らかにしている。

- ① 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか
- ② 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学び

の過程が実現できているかどうか

- ③ 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか

つまり、解決せずにはいられない課題に取り組む中で、知識や技能を獲得し、試行錯誤しながら解決に向けた学習活動を行い、その上で自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげる学習のプロセスを実現することが大切になる。また、その過程で、異なる多様な他者との対話を繰り返し、自らの考えを構築していくことも期待されている。極めて簡略化して示すならば、プロセスの充実に向けて、インタラクション、リフレクションを位置付けることにあるとも言えよう。

アクティブ・ラーニングが育成するもの

先に示したアクティブ・ラーニングによって、資質・能力の育成が期待される。そうした資質・能力には、次のような特徴があると考えられる。一つは、より実社会で活用できる汎用性の高い思考力・判断力・表現力等の能力である。現実の問題状況を解決していく中で自在に発揮される思考力・判断力・表現力等と考えることがで

きよう。二つは、よりネットワーク化され、構造化された知識や技能である。新しい知識・技能と既存の知識・技能を関連付けたり組み合わせたりした、安定的で活用可能な知識・技能と考えることができよう。三つは、より恒常的で、持続的な学びに向かう力である。自らの学びを推進するエンジンであり、自らの学びを推進する意志と考えることができよう。

アクティブ・ラーニング登場の背景

こうしたアクティブ・ラーニングが登場した背景は、大きく二つ考えることができる。

一つは、激しく変化し、未来を予測することが不可能な社会背景にある。社会の変化に対応し、社会を創造できる人材の育成こそが、社会の幸福と豊かな人生を創り出していくことにつながるであろう。

二つは、十分に育成しきれていない子どもの学習状況にある。根拠や理由を明らかにして考えを述べること、解釈・考察して説明すること、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画意識などの育成が期待されているのであろう。

未来社会を創造し、実社会で活用できる資質・能力の育成に向けて、学習者である子供を中心とした、真性の学びこそが、今、求められているのではないだろうか。

資料●アクティブ・ラーニングのイメージ

(3) 育成すべき資質・能力と、学習指導要領等の構造化の方向性について

②学習活動の示し方や「アクティブ・ラーニング」の意義等 (指導方法の不断の見直し)

i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。

新しい知識や技能を習得したり、それを実際に活用して、問題解決に向けた探究活動を行ったりする中で、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮される場面が設定されることが重要である。教員はこのプロセスの中で、教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教師と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。こうした観点から、前回改訂における各教科等を貫く改善の視点である言語活動の充実も、引き続き重要である。

iii) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、獲得された知識・技能や育成された資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。子供の学びに向かう力を刺激するためには、実社会や実生活に関わる主題に関する学習を積極的に取り入れていくことや、前回改訂で重視された体験活動の充実を図り、その成果を振り返って次の学びにつなげていくことなども引き続き重要である。

○ こうした、必要な資質・能力を総合的に育むための学びは、特に小・中学校では、全国学力・学習状況調査において、主として「活用」に関する問題（いわゆるB問題）が出題され、関係者の意識改革や授業改善に大きな影響を与えたことなどもあり、多くの関係者による実践が重ねられてきている。「アクティブ・ラーニング」を重視する流れは、こうした優れた実践を踏まえた成果であり、また、今後は特に高等学校において、義務教育までの成果を確実につなぎ、一人一人に育まれた力を更に発展・向上させることが求められる。

(中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」より抜粋)